

「はむらの道徳科授業指針」教師の視点②

自分を見つめさせる工夫を行う

自分を見つめるとは、子どもが道徳的価値と自分の経験やそのときの感じ方、考え方を照らし合わせながら、更に考えを深めることです。

授業づくりを行うに当たり、主に次のような観点から教材の選定や取扱い、指導方法等を工夫することが必要です。

◆ 道徳的価値の実感を伴った理解

取り扱う道徳的価値のよさや大切さについて、自らの経験等を基に理解できるようにする。

◆ 道徳的価値の実現に向けた自己の課題把握

真摯に自己と向き合うことで、道徳的価値の実現に向けた自分自身の課題に気付くとともに、自己や社会の未来に夢や希望がもてるようにする。

◆ 書くことの効果的な導入

書くことにより、生徒の内省を促し思考を深めさせる。

◆ 子ども相互の対話や議論

異なるものの見方や考え方を知り、自己の考えを再構築できるようにする。

◆ 子どもと共に求め、考え、語り合う教師

教師がよりよい生き方について生徒と共に求め、考え、語り合う姿勢を示す。



残せるもの

福聚山 慈眼寺住職 大峯千日回峰行大行満大阿闍梨 塩沼 亮潤

人間は生まれる時も、死ぬ時も裸一貫です。命を削り、血のにじむような努力をして一代で築いた莫大な財産も、あの世に持っていくことはできません。では残せるものは何かと言えば、誰かの心に自分の美しい生き様を刻むことができるかどうかだけです。

出典：「寄りそう心」 塩沼亮潤著（プレスアート）

※ 誰かの心に自分の生き様が刻まれる。身の引き締まる言葉です。